

目的 生活時間の使い方は、小学校6年の家庭科・住居と家族の項で学習し始める。総2の人間に平等に与えられてい一日を、どの様に使うかは個人にヒリ重要であるとともに、家族成員相互の時間の使い方が家族生活のあり方を大きく左右する。それ故児童の生活時間の実態を把握することは、個人としても家族の一員として生活する上でも、基本的な生活態度を調べる上で重要と思われる。本報は最近の児童の生活時間の実態を調べ、家庭科教育の基礎資料を得ようとするものである。

方法 A女子大学附属小学校、中学校、高等学校生の最高年次生を対象に、各々の課程をほぼ終了した時期の(1983年2月にアンケート調査を行った。なお生活時間は、最も忙しい平日と日曜日を記入させた。

結果 A起床時間 平の最も多くの人や起きる時間帯は、小、中は6時半から7時、高は7時から7時半である。小から高と成長するにつれ起床時間は遅くなる傾向がみられたが、通学時間は小から高になどに従い長く、起床後登校までの時間が高で短い。日は小では平と30分ずつで遅く、中、高では約1時間半の遅れであった。

B就寝時間 平、日ともに、小から高と成長するにつれ就寝時間は遅くなり、また日は平より明らかに早く就寝する。夜中の12時過ぎに寝る者は、小でもめづかなからみられ、中では半数近い。従って睡眠時間は、平、日ともに小から高になどに従い短く、また起床時間の遅さを反映し平より日の睡眠時間が長い。

C手伝い時間 手伝いがないのは、平、日ともに小が最も少く、中が最も多い。また手伝い時間は、平は小から高になどに従い多くなり、日は小、高、中の順が多く、年令とともに手伝い時間が長くなる傾向はなかった。